

千夜詠

表紙イラスト…あめじん

姫貝

試し読み版

姫騎士エルダの受難

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『妖貝 姫騎士エルダの受難』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



妖貞

姫騎士エルダの受難

千夜 詠

表紙／あめじん

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

エルダ・ソルクラウン

亡き両親の残した国を守る王女。国内随一の剣の使い手でもある。

マリア

エルダの幼馴染みの女医。負けず嫌いな黒髪の美人。

鞭のようにしなる長大な足が王女を襲う。フレアに広がったドレスの裾を翻し、すんでのところであわした王女の足元から床に大きな罅^{ひび}が入った。古い神殿全体が震え、天井や壁が僅かに崩れる。

休ませてはくれないらしい。二撃、三撃と波打つ触手のような足がその頭上に降り注ぐ。転げるように避けながらも、王女は反撃の一太刀をその触足へと放った。

だが剣先は粘膜のように滑る軟体の肌に押し返され、ゴムのような反動にそのしなやかな肉体は予想以上に飛ばされてしまう。

もはや奉られた神の名さえ知る者のいないこの神殿。白く美しかったのであろう外壁は灰色にくすみ、絡みついた蔦植物に埋もれていた。初めに一步踏み込んだ時の印象は、荘厳さよりも寂しさ。そして言いようのない不気味さだった。ただ、崩れかけた天井から、木漏れ日のように差し込んだ日の光だけが頼りの薄暗い殿内は意外にも荒らされていない。彼女の知る限りどの神殿よりも広く、石柱の立ち並んだ中心部では、切り出された石畳の床が油を流したような光沢を放ち、高い先人の技術を思わせた。だが今は、考古学的な検証を行う余裕などない。

「まったく、厄介な怪物ですわね」

サファイアに比喻される後ろに束ねた青い長髪を揺らしながら、彼女は距離をおいて身構えた。

怪物もまた獲物の素早さに舌を卷いたように対峙する。しばしの睨みあい。怪物の青白い瞳に高貴な育ちを窺わせる白いドレスを纏った若い女が映った。

宝石のように煌めく青い髪と黄土色の瞳。細くしなやかな腕には銀の装飾のされた長剣を携えている。豊満な乳房の谷間が大胆に開いた襟元から露出し、腰周りを引き締めたコルセットが、彼女の女を強く主張していた。ロングの丈から腰下まで入り込んだスリットから白い健康的な脂肪の乗りをした太股が僅かに覗け、男なら生唾を飲み込むところだ。彼女こそこの国の王女であり天才騎士であるエルダ・ソルクラウンである。

何故一国のプリンセスがこのような醜惡な怪物とたった一人で戦っているかというところ、要約すれば彼女の氣概からである。

王都より程近い村に突如現れたこの怪物はその異様な姿から妖貝ようがいと呼ばれた。ただ生物学的には貝というよりは軟体動物に近いように思える。蝸牛のような巻貝から烏賊や蛸のような触手状の足を無数に伸ばし、二つのギラついた瞳が光っている。その大きさは高さにして大人の男性の三倍はあり、討伐隊の生き残りの話では、その殻は鉄のハンマーでさえ傷一つ負わすことかなわず、内側の本体はゴムの柔軟性で鋼を押し返すというのだ。

この話を聞いたエルダは、その氣の強さと実力の伴った自信から自ら退治を買って出た。一人で赴いたのは家臣を傷つけない想いと、この怪物が女性性は決して殺さぬということからだ。

(さて、どうしたものかしら……)

武器の通じぬ相手に今のところ攻撃をかわすのが精一杯である。だが、いかなる生物であらうと外皮に比べれば内臓は強固ではないはずだ。

妖貝の攻撃態勢に入る僅かな隙を突いてエルダは前へと飛び出した。

「行きますわ！」

縦横無尽に迫りくる触足の攻撃をかわしながら姫騎士の剣先はその付け根を目指す。予想が正しければそこに獲物を食らう大きな口が開いているはずだ。

だが眼前に大きな軟体の壁が広がったその時、妖貝の体から滲み出た粘液にエルダは足を滑らせた。

「くっ！」

二本の細長い灰色の触足が姫騎士の脚部を捕らえて巻きついた。

「こ、このっ……」

瞬間に天地が逆さになった。足から吊り上げられるようになって、ドレス裾が捲れ下りる。「いやぁ……。な、何なんですかの？」

宙吊りになったエルダの下半身が曝け出され、汗ばんだ白い下着が露になった。王女の顔が真っ赤になったのは、頭に血が昇った為だけではない。

姫君が用足しの時以外にドレス裾を捲り上げることなどありえなく、またYの字に大き

く股間を広げられる恥ずかしい姿は生まれて初めてだ。エルダはこの時、一人で来た選択を幸いに思った。

常人を超える脚力に鍛え上げられた太股を揺らして逃れようと試みる。引き締まった筋肉の動きが、対照的に柔らかく、むっちりとした脂肪のついた股内の艶肌に現れ見える。白い薄布に包まれた股間部から広がった熱が、しつとりと一帯を蒸らしていて、そこから濃厚な牝のフェロモンが発散されているようだった。

闇雲に剣を振るう事をやめ、姫騎士は冷静であろうと努めた。取り乱しては反撃の機会を失う。

妖貝は獲物の値踏みをするようにエルダを見詰めている。もう一本細長い足を伸ばして、その先端が彼女の下着の紐止めを捉えた。

「ちょ、ちよつと何をする気ですの!？」

その図体に反して足先は器用だ。エルダがうろたえている間にも紐は解かれ、下着は股間から取り除かれ、彼女の目の前を白いものが落下していった。その時から下腹部の秘粘膜に直接外気を感じ始める。

「ひやあぁ……、な、何てことなさるの！こ、この変態妖貝！」

丸出しになった処女陰部は、繊毛も薄く、僅かな恥丘の盛り上がりを見せ、その秘裂から桃紅色の花弁が覗けていた。動き回っていたお陰でしつとりと汗ばんで、ムンとした女

臭を含んだ湿気が立ち上っている。薄布一枚なくなっただけで空気の刺激を過敏に感じて、エルダの頬は更に朱を色濃くした。

ヌルヌルとした触足の一本が秘裂に沿って這い始める。

「なっ！ くひやつ……や、やめなさいつてば……」

灰色の足の内側には無数の小さな吸盤が付いていて、それが繊細な牝粘膜に張りつきながら前後に擦りつけてくる。悪寒を覚えながらも、性器を吸われ震わされる刺激に戸惑いは拭えない。

「くっ、うう……。い、いいかげんになさい。悪戯が過ぎましてよ！」

上半身を大きく捻り、エルダは剣身を妖貝の青白い瞳に叩きつけた。

グギャアアアアアア——。

そこから蒼い体液が噴出して、反射的に妖貝は獲物を放り投げた。

床に叩きつけられるよりも早くエルダは体勢を整えた。

今だ！

降り立つ瞬間に床を蹴ってエルダは妖貝の懷に飛び込んだ。奴の口が見える。そこから巨大な男根に似たものが現れ、彼女の脇を掠めたが、姫騎士は一気に剣先をその奥へと突き刺した。

「おぞましき怪物よ、冥府へと帰りなさい！」

確かな手ごたえを感じた。妖貝の蒼い返り血を浴びながらエルダはそこから反転離脱する。

苦悶に暴れまわる妖貝の触手が神殿を崩していく。崩壊する壁と天井。瓦礫の山が怪物を飲み込んで、地響きと共に埋もれていった。

エルダは使命を全うした事に安堵し、父の残したこの国を守った自分を誇りに思った。

＊＊

半壊した神殿に静けさが戻った。エルダが村人を苦しめた怪物が完全に死に絶えたことを確認した頃には既に日が沈みかけていて、西方から空が赤く染まっていた。

「まったく、梃子摺らせていただきましたわ」

そう言いながらも潤んだように輝く黄土色の瞳には自信が漲っていた。

日の落ちきるまでには民家のある場所まで戻りたいところだ。妖貝の屍骸の埋もれた場所から背を向けて一歩進みかけたその時だった。

ゴトリと小石が一つ瓦礫の上から落ちていく。瞬間、その下から何かが飛び出した。

ハッとしてエルダは反射的に腰に手を置いた。だが愛用してきた剣は怪物の口の中に置いてきてしまっていた。

彼女のドレスのスリットの脇からそれは中へと入り込んだ。直後、ニユルリとした感触が女の子の大事な部分から湧き起こる。

「へ！ ひやああ……。何ですの？ 何なんですのお……！」

慌てて裾を捲り上げて中を見る。

「こ、こ、これは……」

裾を掴んだ両手が震え始めた。顔面が蒼白となつて眉端がピクピクと痙攣している。

そこには蝸牛のような巻貝を持った烏賊のような生物が張りついてた。そう、あの妖貝のミニチュア盤だ。

「こ、これって……あの怪物の、子供……ですの？」

丁度拳と同じくらいのサイズで、小さな触足をうねうねと蠢かしながら、エルダの剥き出しの股間にしっかりと張りついている。

「ど、ど、ど、どこにくっついてるのです。ちょっとお、離れなさい！」

両手で貝殻を掴み、必死で剥がそうと試みる。その吸盤は陰唇にしっかりと張りついて、離そうとすると肉花弁も同時に引っ張られてしまう。不覚にも性感が湧き起こってしまい、更に股を開いてそこに両手を置いた姿はあまりにも下劣で、エルダの頬を桜色に染めていた。

だがこんなものを恥ずかしい場所にくっつけて城に帰れるはずはない。誰も見ていない

三つ置かれたパンの一つをエルダは手に取った。ロール状に巻かれたその形は、あまりにも秘部に張りついたアレに似ている。忌々しい想いが湧いてきて、憎き仇を睨みつけるような瞳でエルダはパンに齧りついた。

食欲はいたって旺盛だった。一日中部屋に閉じ籠りながらも、姫君は日に三度は全身に汗を滴らせる激しい運動を余儀なくされていたからだ。

そしてその前兆を感じて、二つ目のパンに伸びかけた手がピタリと止まった。
(き、来ましたわ……。よ、よりによってこんな時にい……)

妖貝が目を覚ましてモゾモゾと蠢き始めた。

嫌な緊張感が走る。いつもよりも視線を過剰に意識して、指先の動きがぎこちなくなった。蒸れた股奥のデルタ地帯で扇状に伸びた触足が波打つように動いていた。恥丘の上で這い回りながら、内側の細かな無数の吸盤が陰唇に吸いついては剥がれるを繰り返して、赤く腫れさせている。

人間と同じように妖貝も食事する。普段は、離れる事はないが、大人しく眠ったように活動を停止しているが、こうやって日に三、四度不意に動き始めた。そして自らの食料である牝の淫蜜を得る為に宿主を刺激し始めるのだ。

「くハア……」

思わず吐息が漏れてしまう。頬を桜色に染めて、僅かに顔を顰めた。

食事を中断して自室に走り去るうかとも考えたがそれはできない。出された食事は全て平らげる。小食ならば、予め言っておく。それがこの国の礼儀である。王女自らそれを破ることなどできはしなかった。

細い触手が一本肉芽に絡みついた。

（ああんッ……そこッ……だめ……）

器用に包皮を剥き、真珠色の過敏な突起を露にさせる。この妖貝は徐々にエルダの弱い部分を覚えて、淫蜜を搾り出させる技に長けていつていた。ニルニルと伸び始めた陰核に巻きついて、最初は優しく、そして次第にきつく締めつけていく。

「くうッ……ふはぁ……」

二つ目のパンを手にとってから、なかなか口元に運ぶことができない。

「どうかなさいましたか姫様？ お顔が赤いようですが、熱でもおありでは……」

一番近くにいた侍女が心配そうに声を掛けてきた。

「な、何でもありませんわ。ちよ、ちよつと……喉を詰まらせ……あはっ……お、お水を

……いただけませんこと」

無理に笑ってみせたが、かなり引き攣っていた。

宿主の事情などお構いなしに、妖貝は搾取に躍起になっている。紅桃色の微肉は少々荒々しく虐めた方が効果的だ。吸盤を強く吸いつかせ、何本もの触足でググッと引きつけると、

秘粘膜に湿りが増してくる。宿主の腰が次第にくねり動き始めた。

（こ、こんな気持ち悪い生物に……こんな気分になたなってしまう……ど、どうしましよ
う……）

落ち着きなく視線が泳いだ。基本的に侍女や料理長が王女の食事をジロジロと見詰めることはないが、言いつけに直ぐに反応できるようにこちらに神経は集中しているはずだ。羞恥心が高まると同時に、性的興奮を覚えて呼吸が乱れてくる。

（うう……が、我慢……できなくなつて……きましたわ……）

過敏なクリトリスを刺激されながら、秘裂の中では無数の触足が蠢いている。巧みに焦らされているようでもどかしさに気が変になりそうだ。

二つ目のパンをようやく口に押し込んだその時、侍女の一人と視線があつた。何気ない瞬間のはずだった。

（あ、ああ……いやあ……）

エルダは無理やり想いを押さえつけ、視線のあつた侍女に意味もなく笑つてみせた。微妙に引き攣つた微笑みを投げかけられた彼女は不可思議そうに釣られて笑う。

ジュワンと大量の淫蜜が漏れ濡れた。見られているのだとはつきりと意識したその瞬間、どうしようもなく欲望が抑えられなくなった。

（あはああん……我慢できませんわあ……）

気を紛らわせようと視線を移動させた。食堂には十名ほどの侍女が整然と並び立っている。時折チラチラと視線がこちらを向いて次に何を要求されるかを探っているようだった。気持ち良くなりたい、気持ち良くなりたい、気持ち良くなりたいいいいいいいい！

「姫様……」

（ビクッと緊張が走って体が硬直した。嫌な汗が脇下から腹部へと伝い流れていく。

「な、なんですの？」

「いえ、やはりまだ体調が優れないのでは……。指先が、震えていらつしやいます」

侍女はあまりにも真っ直ぐに自分を見詰めてくる。少し潤んだ瞳に本当に心配してくれているのだと分かった。

（ああ……そ、そんな眼で見ないで……）

罪悪感に苛まれ、自分がこの状況に興奮してしまっているのだと気付いた。腰が勝手にくねり動き出しそうだ。

「ありがとう。でも、だ、大丈夫ですわ。久しぶりに皆の前での食事が、とても美味しいものですから、感激してしまっただけの、こ、ことですわ」

誤魔化しきつたものの、秘芯から湧き起こる激しい欲求は高まるばかりだった。何人も家臣のいる晩餐の席で、決して自ら望んだわけではないが、猥褻な淫生物を女陰に張りつけ弄られている。物理的な刺激のみならず、スリルと背徳感に理性が桃色に埋もれてい

くようだった。

（もう……だめ……）

桜色の乳首の突起しつくした豊乳に左手が伸びかけて、エルダは何とかその方向を三つ目のパンに変えた。ドレスの内側には汗が滴り、甘い香水の匂いに淫らな牝臭が混ざりだす。円錐状に痼り立った乳首からジンジンと違和感を覚え、そこから広がった痺れのようなものが、刺激を与えてくれと急いでいた。

（い、いけませんわ。こ、こんな場所……。はやく、食事を済ませてしまつて、部屋に戻りませんと……）

彼女の精神力の限界を試すように、あのペニス口がいよいよ伸びてきた。

「あふっ……ん……」

押し広げられる刺激と興奮に思わず喘ぐ。初めは指二本程度の太さだったそれは、成長著しく長さで太さは今や人間の男性の興奮時と同等だった。もつともエルダは人間の男性との経験は皆無である。

淫蜜吐き出す膣孔がググッと肉棒に広げられていく。

（こ、この感じ……。また一段と太くなつてますわ……。こんなもので、今、私の中で暴れられたら……）

もはや作法もあつたものではない。無理やり最後のパンをスプーで流し込む。その間に

も妖貝の肉棒が膣内膜を苛烈に擦りながら抉り侵入してくるのだ。

「うぐうう……」

口に含んだスープを飲み込むのも苦しい。口端からだらりと一筋白濁色のスープが漏れ出てしまった。眉を顰め、頬を桜色に染めた顔の口元から白く流れるその光景は何かを連想させる猥褻なものだった。

エルダが何とかナプキンで口元を拭ったその時、肉棒が膣内を完全に埋め尽くした。

（ひゃうう……、入って……入ってしまいましたわぁ……）

だが、これで全てを食べつくした。もう少し、という思いがエルダの精神力を回復させてくれる。

「ご馳走様。……料理長、今日も美味しかったですわ」

涼しい顔を作ってみせる。だがクロスの下の下半身はもはや我慢の限界で女性上位の体位を思わせる腰のくねりを見せていた。

「ありがたきお言葉でございます。体調の方はいかがでございますか？」

余計な事を聞いてくるな（早く部屋に戻りたいのに！）と言いたげに眉端がピクピク痙攣した。笑みを絶やさずエルダは答えた。

「え、ええ。もう、大丈夫、ですわ」

膣道の粘膜ヒダが妖貝のグニユグニユとのたうつ肉棒で震わされている。思いきり感じ

し火で熱せられたりしたら、

（死んでしまいますわ！）

そんな王女の悲痛な想いを露ほども読み取ることもできず、マリアは蝋燭に火をつける。

「さあ、覚悟なさい。こんな蝋牛もどきなんて、丸こげにしてあげるんだから」

マリアの様子がおかしい。異様な興奮状態にあるようで、呼吸が荒く歪んだ笑みを浮かべていた。ゾツとするものを背筋に感じながら、エルダは逃れようと暴れた。だが四肢をしつかりと拘束され、術はない。

火のついた蝋燭がエルダの開かれた股間に近づいた。ゆらぐ炎が貝殻を炙り始める。

「うぐうう……」

初めはほんのりとした熱だけだった。それが徐々に内部が蒸されると、同じだけの熱さがエルダの秘裂内にも伝わってきた。

「あ、熱いいいい。や、やめて、やめて下さいましいい」

激しく首を振って、苦悶の表情でエルダは訴えた。敏感な牝粘膜が直接焼かれているような感覚になって、ヒイヒイと腰がのたうった。全身から汗が滲み出て、ギシギシと診察台を揺らしていた。

「止めてええええッ、死んじやう、死んじやいますわああああ」

狂気に満ちたような顔でマリアは炙り続ける。

「あははは……あのエルダが、こんなに泣き叫んじゃって……。か、可愛いわよ。いいわ、いいのよ。ああ……快感……」

軟体物と蒸された女陰の合間から湯気が立ち上った。そこに溜まっていた蜜汁が蒸発して、強烈な牝臭を散布していく。エルダは背を仰け反らせ、激しく豊乳を揺らしていた。口元が震えて泡を吹き出しそうになったその時、自律神経が麻痺した。

ジヨバアアアアア——。

失禁して噴出した尿水が、貝殻を伝い滴って蠟燭の火を消した。その湯気でエルダの股間とマリアの顔の周りは白く霧がかかる。

キュウッ！

妖貝が甲高い鳴き声を発した。

呆氣に取られていたマリアの体に触足が伸びた。

「な、何がおこったの!？」

蠟燭の炎に強引に目覚めさせられた妖貝は、本能的に近くにあった牝を獲物として認識したのだ。

数本の触足がゴムのように伸びて、マリアの細い腕と黒いガーターストッキングに包まれた脚部を捕らえた。女医はやはり黒の下着の上に直接白衣を着込んでいる。更に数本が白衣の裾下から生肌の露出した股内側を這い登りだし、最も体温の高い秘部を目指してい

った。

「ちょ、ちよつと、何よこれ！」

エルダの股間に張りついたままで、触足だけを伸ばして別の獲物を狩りにかかる。そのあまりにも貪欲な行動はこれが初めてだ。

触足の一本がいよいよ薄布に包まれた女臭匂い立つマリアの股間部に到達する。そこはエルダと比べて漆黒の恥毛が濃く、こんもりとした盛り上がりを見せていた。更に数本が後に続き、巧みに下着を押しつけて、脇から内側への侵入を試みた。

「嫌ああ……やめなさいってば……」

王女と比べて奔放な女医は男性経験もそれなりにあつて、奥肉は充分に熟していた。それでも粘膜はサーモンピンクの美しさで、花弁に色素の沈着はあまり見られない。エルダ虐めの興奮から、既に陰唇の裂け目から露が漏れ出っていて、湿地帯と化していた。

「や、いやあ、た、助けて、助けてよ、エルダ」

朦朧としかったエルダの瞳にぼんやりと身悶えるマリアの姿が飛び込んできた。妖貝の触足がマリアの蕩けるような粘膜裂に割り入り込むと、その包み込むような滑る性感が王女の陰部にも伝わり始めた。ジワッと広がり、女である以上本来は体験することのない異質な快感を覚えた。

「ん、んうん……」

心地良さが寝ぼけたような意識をなかなか覚まさせてはくれない。

「わ、私……いったい……?」

霞んだ視界がようやく明確に整った。触足に四肢の自由を奪われ、股奥を弄ばれている親友の姿にエルダは絶句する。

「マ、マリア! 何が起こっているというのですの?」

瞬間重く広がる快楽の波動が未だ尿蜜滴る女陰から湧き起こった。

「ふあああ……こ、これって……?」

まるで自分の生殖器がマリアの滑りきった肉化弁の合間を弄っているようで、女体から得られるヌルヌルとした蕩ける快感がダイレクトに伝わってくる。じわんと湧き起こる熱感では先程の炎とは違う陶醉するような心地良さで痺れと共にエルダの全身を包み込んできた。

(な、なんて……気持ちいいんですの……)

思わず素直に受け入れてしまう。恍惚の表情を見せて身を預けてしまいそうだと。

「あはああん、駄目ええッ! エルダあ、何とかしてよお」

マリアが叫んでいる。気味の悪い軟体の触足が繊細な下腹部の裂け目をのたうって、その刺激に戸惑い喘いでいた。

「ハア……無理……ですわ……。貴女に……拘束されて……フハア……しまってますもの

……」

細い触手が数本伸びて、ピクピク反応し始めた肉芽に絡みつきます。編むように重なりながら突き伸びたクリトリスを上下左右と挟み込み、過敏な性感集中部を流れるように擦りつけていく。

「あひやあああッ……そ、それダメええええ——」

脳髓に突き刺さるような苛烈な快感にエルダは悶絶する。開ききった口から、唾液を飲み込むことができず、涎が漏れ出していた。

エルダの一番気持ち良い擦り具合を覚えた妖貝は巧みな引き締めと摩擦の繰り返しで刺激し、溢れ滲み出した淫蜜を美味しそうに吸い込んでいた。

「いやあああ、こんな気持ち悪い生物に犯されるなんて……絶対いやあああ……」

ようやくもって王女の気持ちを理解したマリアだったが、触足はその見た目以上に力強く身を暴れさせることもできない。

女医に向かっていった触足の中で最も図太い一本が肉化弁の谷底に侵入を開始した。

「いやあッ、入ってきちゃううう」

サーモンピンクのより色薄い蜜口を容易に探り当て、ぽつかりと開き始めたそこに無数の吸盤付きの触足が、蜜液を迸らせながら一気に捻り入った。

「ひやああああああああ……」

同時にエルダに張りついた内側では大きく成長した肉棒が突き伸びだした。

「あひゃああん……きますの、きますのね」

ドロリと濃厚な淫蜜の溜まった肉ビラを捲り開き、ズズズンと硬直した熱い強張りが粘液を絡みつかせながら膣孔を押し開いた。

思わず腰が引けるほどの重厚な感触にエルダの中が満たされていく。膣内の何層もの粘膜ヒダが震わされ、仰け反りながら陵辱を受け入れていった。

「うぐうう……ふひゃあああ……アハあ、ハア……うハア……」

子宮奥にまで到達するとマリアの中に入った触足の感覚までもが伝わった。

（す、凄いですわ。今までよりも、ずっと……き、気持ちよすぎますううう……）

自らの膣内の性感にマリアのものまで上乘せされて、その激楽は聡明な王女の理性を吹き飛ばすには充分すぎた。

「ニユルニユルとゴツゴツがあああ、私の中で、ふりゃああああ……暴れてるうううッ。吸われちゃううう、吸われ引かれちゃうううう……あひゃあああ……こ、こんなの初めてえええ……」

叫び喘いだのはマリアだ。太さこそ一般男性の平均ほどだが、吸盤の疣が膣内壁を擦り、吸いついて内側から引っ張られる。初めて味わう快刺激に、牝の本能は呼び覚まされ、相手が化け物だろうと関係なくなつた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>